法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-06

三輪

三帖

僧ことば

是は新かに三病を
作り作居たる方
也僧形なれども
代参をけるを
ぬ女性一人ぞ

いはん……
むし信敬あそはさは猶も
此経律けをこえて
ぬ女性一人たにもあらは
乃形そ事のみ今是
事りて信敬
おもやにすとも
三福菩提道にありて
ゑくこ此異縁あらん
ゐや老少不定之
世の中……
かの秋の……
……
……
春月にも三福の事
依……
又……
も信敬とそ……
……

住居する女房たち若衆梅
又ハ山ふけり前々参
も僧都とそ年々其れ
人のけは冬飛騨女伊達に
志賀といふ所の花も春
伝へてきくに東からさ
思へば山とさ松の霞
中山　山路女房花の
猪の月といふ給ふ酒
みはや稲の田人の霞
なをも山里をもてはし
のちあたりつ霞
花の葉を出はさこそ今は
好に　このさかへ都
ちゝん　行ふすいかにいかん
小六江に志てきあり
ゐのけて来たる人の山
寄　入る時分も
月光地女房衛

[illegible]

[illegible]
若[illegible]ゝゝ御ゝ[illegible]
さ山[illegible]ゝ[illegible]所[illegible]き
[illegible]申[illegible]てのわ
とふ出散と一文結入
何心こ語も此所望と
やご申さ雅乃事也
夜をもいつ拝借候
玄雅やらば御も房之
出張中候　心けと候
さ雅老見とゆかのぞむ
雅下ど梅こ出申ハ思ふ
存来り所御所望
もみ紙拘へ俣紙
明めし出へ見るも横
三橋乃里山本将参
なりごさても我居付三橋
乃山本家へ不くやそ
ナ々如来不とごさ申すり
我とは君乃白所と参

なりけりも我唐は三橋
の山寺の入相の鐘
今ぞ知る身の程
我とは君の形見の
行きつ帰りつ是も夢
その時は我は
らいでこそ暖ついに
夢かとよ雲の
夢をかへね旅の床の
櫻を見て法は道
ありし櫻を宿り
比叡山唐崎と言ふ
頼もしく三橋の星
近き方の山陰
森は幽かに見えけり
星の影もなき御月
孫の代まで以て我家
らんし　柳の葉や
船よりの松の下枝を
見上げは遥かの女人
あふぎの袖の行方

らんし[illegible]や
難波なり松の下枝を
男生は住吉の女人
[illegible]たる哀のかりた
あそやとうそう[illegible]
哀のつきに今[illegible]
宮[illegible]も[illegible]みて見
生は哀なるところ[illegible]
清くきよし我が[illegible]
なれ[illegible]
打とけし 千歳[illegible]
こそ[illegible]のはかり[illegible]
人のちとにあり[illegible]
是ものかの松のふかき
さかえ[illegible]
[illegible]そや[illegible]
[illegible]
と[illegible]
[illegible]
[illegible]

素世ノ前生法ありし
と聞て撰集を好みの
道をもすたれ世の中に令
和歌の風ひろまりたり
最初の家々ねりなどを
や 家ゝ風を我撰
上人ハ四月ゝとして
法ゝ勅ゆすけとなし
給へし 御法ゝ次
八雲かなりさは是ゝ
なれ非道ゝ 前生
けハ必ゝの末後君かゝ
為すまりけれは令や
日蓮
女御に三瑞の非ゝ
然ゝ生ゝけ共ゝ次すき
久命をさせるかゝ是
御ありの為情子の夜
ゝ年それ世をゝ

久しき世をへてこそ君
便なりし為情子なり衣
身をそれのみ思ふにみ
ね親かたよりみて歎く
はかりしこれの比葉や
丈祢代乃着物祢か
末代乃前生のためさぶ
いかたらを人法華しや
さかくしてかも世
のためかり中かも
たゞ数鴻の人を宝まうく
神力さし思ひ現らの
旅のまうり志ちけ
かは是作りん大和
國よ多くしち丈夫
のまつへ母代解し
玉椿ものよ文哉
たゝきうこのり但
いうし此人救かはなれ

玉椿ちとせの春の
なかめにも
ふるの山

海よりなる世の間楽
思ひを根よりゆきて
秋ありて鈴虫何寺
の御局して川の瀬
所越志てんそそ切て
ましふ計とうつ寺尭
すそ世紙ざら
六そ頭をし人あ
君ひうだけし建部
の系なりくもをや
ふやたまの篝
継ふ所して紫系
きりぬしつ程ふこの
山井代如神うへや松
のあてそえふ二面かた
あこはなをも何返し
や其りし今際の
ふゐのうらけのかり
ちるを三橋の志ものゝ
きりし秋と紙うゐ

や英りし人の儀なる
ふくのうらはなり
ちまた三嶋の志きりの
をれし秘と級らむ
はうそらかしや实
ふ羅さ之神祇こころみ
つけて天津道那さ
たかしらゆうのふり
と神代紫地祇色し
を停さやかなれらか
の上へとりくはらん
是を岩戸とよはしめ
られ神とよばれん
とそ八百万の神たち
是そのもとしめなか
千岩破天照皇大神
を神そし神たちと
あらへ給ひにも氐
三尊世とつかやゆえ
八百萬の神の姓摩
かしめて是とすけ

あまくだり給ひしより
三代とかやぬし
八百萬の神遊ひ舞
の前にて是をすれは
き神感しそれこそ
舞給ひて天照大神
聞しめし岩戸を少し
ひらき給ひて又その世
光となれる日月も
御覧みれは面白やと
人の顔面白やとて
神の御心の物語
帰りて三種の神
一称も残さす
ゆくる岩戸や天の
古の秋風のそよく
雑きよ萬のはかなさ
しるしや残るなるらん